湖月抄

しゐかもと

43

8?3
.M8K5

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

鈴虫 竪并 細 巻ノ名以テ辞并ニ詞ヲ号ス之 詞ニハすゞむしの
ふりいでたるも 鈴虫はこゑやむごくいまめかしともあり
辞ハ 大かたの秋をばうしとしりにしをふりすてがた
きすゞむしのこゑ などあり 細 源氏五十算の夜より秋
までのほど也 竪の並也 花 源氏五十算様器の
次の年より女三宮出家

こ のすゞむしの
細 持仏をはせてもてなされ
いまさ念誦堂はいでき
ぞうあるよし六条院ふかく
源の本意也 ふかせ
御心ざしもせあふ
所 源氏君のけんぞし
ふかく持仏のれまへてひ
ども せきさ給ふやうて
とい閑に御念誦堂の
具どもさせられさ
此は供養はよくされさ
るとなり

夏ごろはちすの花の盛りに入道の姫宮
の御持仏どもあらはしたまへる供養せ
させ給ふ このたびは大殿の君の御心ざしにて
御念誦堂のぐども こまかにとゝのへさ
せ給へるを やがてしつらはせ給ふ 幡のさ
まなどなつかしう心ことなる
みしきさえしひめをまつり
ながいふこゝせ給ふ花づくゑの
ひかげいれうしよめぞめでたう
らうよからひそめつけられ
すれなさ給へるのさてのてび
よりてあげくうすろの方に法
このものそくのてびを
所は梓の匂せんのてび
をわけてうしろの方に法
華の曼陀羅をかけ
奉の法会の御紋
は御帳の帳をおろして
寝まよりて東は帳とを

細 六条院池の蓮也
細 女三宮の事
此 念誦
幡 おしよの幡也
楽 源より奉給ふを
師 花づくゑに立つる
細 源ての幡 翔鳳 今の世のこまやかの花
細 仏像より本らの女三の帳かけを持仏
細 四方の帷をおろす

いふ也。四方にさゝぬのうこび
らとこれらるへし
からの百歩の　細 唐此方
えかうは　そへわたせかうかうなる也。
名義三ニ香ハ是離ルヽ之名。
今中ノ臭気上テ薫ス於空ニ四
十万里諸天清浄ヲ以ス故ニ不ト云
厭也　花 百ぶのえかう
りうとうきさうかもし
けうじの菩薩
細 脇士ハ観音勢至也。観
経ニ无量寿仏住立空
中ニ観世音大勢至是二
大士侍立左右ニ
あをきしろき紫のはちす
をとゝのへ　是ハ花を作
て閼伽皿に入てそなふる
今もかうるし人のかざりに
みつをかくし　細 蜂蜜
こゝろは物ハ蜜の入を
蜜とのをさしつかふ
そうかうくしらうこし
みづからの御持経そ
新 天暦九年正月四村上天皇
為母后被供養宸筆
法華経有六講
これをだにこの世の結縁
細 源と女三宮と今生
の契もうすくありける
おもひてなり

まんだらかけたてまつりてしろかねのけうに
たかくことことしき花のいろをとゝのへて
たてまつれり。みやうがうにはからの百ぶのえかうを
たき給へり。あみだ仏けうじの菩薩おの
のびやくだんしてつくりたてまつりたるこま
かにうつくしげなり。あかの具は例のきは
やかにちいさくてあをきしろき紫のはち
すをとゝのへてかえふのはうをあはせたる名香
みつをかくしほゝろげてたきにほはしたる
ひとつかをりにほひあひていとなつかし。経は
六道のしゆじやうのために六ぶかゝせ給て。み
づからの御ぢ経は院ぞ御てづからかゝせ給
ける。これをだにこの世のけちえんにてかたみに
みちびきかはし給べき心をぐわんもんにつくらせ
給へり。さてはあみだ経からのかみはもろくて
朝夕の御てならしにもいかゞとてかむやの
人をめしてことにおほせごと給ひて心ことに
きよらにすかせ給へるにこの春のころほひ
より御心とゞめていそぎかゝせ給へる
かひありてはしを見給ふ人々めもかゝやきまど
ひ給ふ。けかけたるかねのすぢよりも
すみつきのうへにかゞやくさまなども
いとなんめづらかなりける。軸へうしはこの
さまなどいへばさらなりかし。これは

すくづきの人へむかひてやく
かけうけるかねのすぢよ
いま源の墨付はいとやく
とくし
これにくしは諸のけそく
河 流 花足机 細 源此目
簽の題ハ別に在るべく

そのおくハ導師のま
へにおくべし
花は帳台の上に…
おなじく経の机をなほ
れしるべし河海自余の
說もあやまれり

かのほかもろもろひとは
抄 女三の宮にかゝりたる
ハ座構よりなされたる也

そこハようくハ
細 …

ぢんのけぶりつめたまりて。仏の御おほ
おもしろうしはいのかたにかけられたまへり。
じうくりたてて。講師まうのぼり。
ぎやうだうの人々まゐりつどひたまへるに。
院もあなたにおはしますに。女宮のおましに
かしこのひさしのぞきまでれいならずけさう
ちきなるにかはりなき所をくあつげ
なるまでくるしらきこえさせたまふ
房ぞ六十人ばかりつどひたり。そのさ
こしのすそとまでかざくありけれ
よそひども。ゆかしとあはれにぞ。
くあるぎさらしをぞいひて

へあつく源氏のきよりて
くさ。いり白の
らんのやうにすり
錦絵
ゆかしの
人くひそ
ぞめる
細 講師

例の物かくらねどん
雅 女三宮の方にへてのさ
まをいふ
る女としても…

ひれかしあつか
物よりつゝみ 雅

まうくいづくの煙ぞしたきとなんぬる
よけまい富士の山よりもけむくゆか
しらおもうハ源いるすさまじさなり。
どちのものハ方ほのかに川めての
ぢうまりのくんとうつかくべきこともなれ
ばかうすずしき人のけはひ
さ川めてうんしとうべくなき例のおもむ
らぬけらんべどもの所にとく経実な人
げにとされゆうていとちいさくおかしげにて
ひれかしあつかひ…
さうしもわするゝ所のさうじ
とりならちくらすけそうなるまま

らぬつくはかハ女三の独
也而し今ハ各別ニ
しら〳〵と
まうけて
細 [illegible]
とし[illegible]ハ女三宮
ハ[illegible]
[illegible]
こゝやりあふもさ[illegible]
仏種を源の[illegible]
つけくも女三の[illegible]義
くハ尼ふも[illegible]
せしあと[illegible]
[illegible]
[illegible]源の[illegible]
[illegible]
[illegible]源の[illegible]
とハ[illegible]
[illegible]
一蓮托生の心へ 此各留
半座乗華葉 五香讃
[illegible] 細 五會讃
下ヶ池中花盡滿花[illegible]
惣是縁生人各留半座
乗華葉待我閻浮同行
人と[illegible]各別[illegible]
[illegible]
つり
[illegible] 細 女三宮の
[illegible]源の[illegible]仏世[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]源ハ我一蓮[illegible]
[illegible]

七僧 細
講師 読師 呪願
三禮 唄 散華 堂達
師 [illegible]

人ハいれ給へ[illegible]
[illegible]
給へ。[illegible]
[illegible]仏の[illegible]
よりうらきの[illegible]
よいそれんの[illegible]
り源の母[illegible]
つまよ[illegible]
ひね
源 [illegible]
つあの[illegible]
しぬ[illegible]

ありがたや
書 へだてなく蓮のやどりとちぎりても
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の法眼[illegible]
方の[illegible]
あやの[illegible]袈裟[illegible]

こしなん人ハ　暁めいや
こゝろしらぬ人の
なるべし

さて今の世にかゝえもすぐ
れたるこけさゝゝきつとと
律師の才覚もすぐ
れたるとこそなし孟さえ
いとえゆゝこけさいおれい
なきしさてさへ八弁抜
なり

こしおんへハこうよハなすべくくなりあらずとめて
細弄花抄
きりとやもつりしうら雨うるうしとまかられ。
律師孟そ講座よりのぼりて表白とよむこ
うらしのいとくくうしくしの人をとりうく。
細女三宮ハ出家の御のり
の世にハ。くれまつるさうりといてひとらす
れいまて。なくさうくまして色ぞにさ出懸を。
花ハ女三とのなりけり
律師のり
法花経をもとなひ給。くうしとくふうきこ座
まゝとれハとくイ
河寛文手　細弁舌おもし
とわうつくしくて今の世にまざえてとしうとく
まゆゝこけさささくしを。いとくもそていひ
てけるゝいとこしうきれいうれつへつぐ
細雨とのなりしく
ねわうれ給。られそくでむのびうく出念誦
孟　御寺院の事とめし
雲のとうしめとありしうらしとすれどもう
孟朱雀院の
うふき。山のとうしもとうしめてうれ

花出讀經の様也
れつひどとわりわれ讀經のゆきうむでいと雨
きさまくおくしうまたすんこらひろごりける
細六条院也
院よまうけさせあてりけうつしてくてとくそく
おのゝかれぢもとく
と出つしさじよりのつなすうしうりける
内朱雀院よりの御布施のよし
とまりてくいまめしきこととくりのくうく
まうくれて。夕の寺ゆとそこ雨ありけなる
すらく雨をれいうしはひよかりてうさん
細雨ほとなくふるまうりてくるよ花
備どもとハくりうくう。今しもいぶらし記れ
孟女三を源氏よせ給也
らうそひくもちりうすへりつゝさつ
女三ノ
え給院のれりてかこのれそうりぐんのこ
やまずとうれ給ちんもつるのゝとまみ
くめやすうりめくべく中のてまへいどとえまりくそく
源のおもひの事也

夕の寺まつとらあげけるに
まさて　細　御布施の事を
いれ請就とハつまりある時
からのさゝ御家中さ出る御
也。重畳禪林之断處
晩寺僧帰。花　備ども
うれりいうしくふ祠よけそ
又のことくりなりて雨也し
院のこうしく　細　朱雀院
世三条宮ども　銭様り
みへいうりいはりつこうつし　なら
むらしそ孟給へり
こそくうそていゑがりつ
孟朱雀院ハ給よハ女三の給
まへつさく言うれバ三条へ

細はなれてはおぼつかなしと源乃
心のうちにおもひつゞけ給ひて
いまだ六条院におはしまさせ
給ふ也

ありはてぬ世
河ありはてぬ命まつまの
ほどばかりうきことしげく
おもはずもがな

この宮のつくらせ
源氏の君作らせ給ひ
て三条の地を御さ
たある也

もそハおぼつかなかるべし。明暮見たてま
つり聞えうけ給はらんことをこたらむに
ほいたがひぬべし。げにありはてぬ世
いくばくあるまじけれど猶いきたる
かぎりハ此心ざしをだにうしなひはてじと聞え
給ひつゝ此宮をもいとこまかにきよらに
つくらせ給ひ御ふの物どもくに/\の御さう
みまきなどよりたてまつる物ども
はか/\しきさまのハみな三条の宮の御くら
にをさめさせ給ふ。又もたてそへさせ
給ひてさま/\の御たから物ども院の御しよぶん
にかずもなく給はりたまへるなどあなた

ざまの物ハみなかの宮にはこびわたし
こまやかにいかめしうしおかせ給ふ。明
くれの御かしづきそこらの女房のことゞも上
下のはぐゝみハおしなべてわが御あつかひ
にてなんいそぎつかうまつらせ給ひける。
秋ごろ西のわたどのゝまへ中のへいの
東のきはをおしなべて野につくらせ
給へり。あかのたなどしてそのかたに
しなさせ給へる御しつらひなどいとなま
めきたり。御でしにしたひきこえたる
尼ども御めのとふる人どもはさる
ものにてわかきさかりのも心さだ

みなかの宮へはこびわたしも
女三の御めのとなどや
出家せられしに人々そへ給ふ
御心ざしにて我も人も
御弟子となる也

わうおしさるさくぐうすくね
今うしもちぐ宮
孟 源のとくめあふく。一人
あしきんのあはれど引そ
こるよ孟とく。秘始りし
ろさんくし。ゐんさごまう
ぬがまうしつそ八趣のふあ
あしきくと。源の心の別
ゐり
この段くは虫どでも
おもむのまくでおくま
への中のへいの東のきを
とおしうえて秋らり
てらせまふとわう哉

例の心とわうまじきさす
ま 細 源のようにいひ
どやとれ花され

さゆくしをつくし河べさ浪ゆえりらく
なんなりせ給ひう。さうらくとひみは秋もらく
とゞしうひそれど。神そくのもとにきうしめし
て。おうまじきことなり。こころすすめぬ人
すうしをまどりぬれば、うき人のひとくろ
しう。あいくしさゆめし出らうわざらみ
ひそこいらぬんまで。十よ人ぐうらのやど
ぞがうしとふくせさうしあとの秋に
むしじとをやきをまうひく風もとこし
源氏てかりりの言葉よ。わづらりいまで出乃
若ここまふやすみくるまれてゆきとるれぬ
彼もまんしまやすしまへで。例のはらしる

ぐくやうのわうもあり摘
じきるすろうて女三
のむろしくそひまふく

今くうれてる人ゆきまきのへ
みもがる
孟 源のれおすき西へ扮て
ぬがしあせぐる、ぞれまい
うどと女三の心し。細 三条
まつてもうらくとがせ
どもさまずくよきうしるぞ
さもえのまいぬく
すみ秋の月吼ぬざ飢ぐし

いわうまじきこしみえてあはうれど。ひと
へよむつしさくさよどんなし給へり。
ひとめはこそりくうへしうりそあ
給しかうらみはうき秋へ給うお色
もうしこよおすりからりふしれんとかいぞ
こしなうじのはらすて。拙わりけしとひき
むも給みしは世のそむきうれだ。今いりそ
くうれどくんやうもさまよ。あすらりにあぞ。
ゆりしあふぞううそて。ひとぐうれしう
んはともゆるふとかるもあさがりまれじと
よしすゆくえさも。よあり給つで。十五夜
の月乃ゆうぐ新らくしる夕暮よ。仏の御前

我八月十五夜よりきたる
しより

わくらこのふと　阿　阿弥陀
大呪　師　阿弥陀真言し
ぶをへドもと後べし　源も
此大呪を誦まして

松むしのうん　松虫の藝之
孟　松虫さんとあり本あり
の文字みならよしとし

孟女三之
つよきおりして、きしちろうなかあ[illegible]河く
わんぢし[illegible]さ尼君ら二三人[illegible]
[illegible]らくすあかつきのとし[illegible]
閼伽器　孟　花皿之　おほ
[illegible]ひるみじ[illegible]うらいしる
そくめさきあるんし
こられそくさあつるいしく[illegible]側の[illegible]
源の君女三
[illegible]まて虫のみいしきげうきつくゆ
あべりましそ秋もあのひぐらしずし[illegible]、
わらこのあどいとくらくわのくこと
およ虫のねいしをげうとあり
げなこ[illegible]くおもしろるのよすむしの
細　源の謡
みり[illegible]ろ[illegible]やりまかうし秋の虫
こゑいづれとるさ中に松虫のうんとぐれ
細
ころして、中ぞめのくろうさ[illegible]ふいて、

いとわさしすらめとりつくきあさとまつる。
松虫　とし
師
あるくなきさつくりこそすくるなれ。
細
ためはさり ひさく命の程ぞくるときむし
まそあつべさくらうまりをそしくとうぬれ
くぜまでろけき程のまん[illegible]くよこ[illegible]
おしまぬもいとへてそしんあかしまさん
まれろす虫いろろやまくいまめめひさ
孟女三
[illegible]らくしらけ[illegible]などのつまん
女三
あるの秋どがしとろうめとわうと
てがさくすず虫の聲と[illegible]やうまの猫ふ
いとるまめらくわそてよ[illegible]や。いりま
源氏
まりや。いづく[illegible]の和[illegible]みてそとそ

あるくうきさつくろ
細　聲まりずくりあるまで
[illegible]しにうらぞ[illegible]
くなべきまうともある
いたしとし

いくなさあらむしほん
細　うらうけるるさ虫
としんぞるをそうとく
あ女三のみをふくまゐ
よりよし
細　今めき
[illegible]その秋らい
よろし源の此の[illegible]どうけ
てのろ[illegible]上るいうき
世と捨てらく[illegible]の[illegible]
とろうまのぞるをりとよし
[illegible]ふるべしされど松虫
八様がうしとし
孟
いまつりや　さあうよ
何とて秋をうしといひ

あはれなるゆふくれのそらをうちなかめつゝ秋の夜の月をみてもなく〳〵

そでをしほりてなけく[illegible]

みやこの君をおもひつゝ [illegible]

虫の音にもなくもの[illegible]

花すゝき露にしほるゝ[illegible]

しらつゆ[illegible]

いかにとふ人もなき世にすみ[illegible]

たれをまつ[illegible]

ありともしらぬ[illegible]

さむしろにひとりふしつゝ[illegible]

師琴の[illegible]

[illegible]

御殿の[illegible]の盤裏

[illegible]

[illegible]

虫の音もかれ〴〵になりてさひしさまさる

のはらのさゝ[illegible]

すゝきをさら[illegible]

ゆきまよふ月さへもいとゝかなし

かゝる哀なる空をなかめて

中〳〵にうきにつけてもなくなく

なかれてゆくつきひにつけて

ことのねをきくにつけてもいとゝかなし

と夜はいとゝしのはれてあはれなり

[illegible]

なつのよの月のひかりも[illegible]

てまくらのまくらのしたに[illegible]

とはれぬもまたさらにうき[illegible]

ゆふくれはくもの[illegible]

なくさめかねつ[illegible]

こよひの月のひかりにも[illegible]

こゝろをつくすあきのよの[illegible]

かくしはかりのうきこと[illegible]

のはらの秋風の[illegible]

ときはなるまつのみとりも[illegible]

人のこゝろのうきをしらぬ[illegible]

[illegible]

名しくもえみつる

虫の音もかれ〴〵に[illegible]

くのはらの[illegible]

秋のねさめの[illegible]

つらかりし

秋の夜の月をなかめて[illegible]琴を

ひきならし[illegible]

[illegible]

月のえん

[illegible]八月十五夜[illegible]

[illegible]の[illegible]

の[illegible]月の[illegible]

[illegible]

[illegible]秋

の月雲の上[illegible]

られ 拾遺集

月見るよひのいつとても
細 三五夜中新月色
いつとても月をみぬ秋は
なきを、とりわき今宵の月
のめづらしきと
げにわが世のほかまでこそ
二千里の外まで思ひやる
ちそけに我世の外まで
てといひけり。と夜の月
によみしひのことを[illegible]
しと

御琴のねにも袖ぬらし給ふ
師 柏木の事ハ甚吟悲とぞ
うち給ひし程[illegible]
じとすゝめ給ふなるべし

みすのうちにも
孟 女三の宮[illegible]曲す
きれども御琴の音にぞよ
柏を源の[illegible]

冷泉院の御あそび
細 冷泉院より[illegible]
[illegible]
左大弁ハ紅梅の[illegible]
式部大輔ハ系図にみえず

めをし給ふ。御ことゞもの声〴〵かきあ
はせて、おもしろき程に、月見る宵の（源の詞也）い
つとても物あはれならぬをりはなき中に（孟 四季ともに月ハ面白しといへども秋ハ[illegible]）
こよひのあらたなる月の色には、げに猶我
が世の外までこそ、よろづ思ひながさるれ。故
権大納言（細 柏木也 彼詩の故人心といふより柏木の事を思ひ出給ふ）何のをり〳〵にも、なきにつけて、いとゞ
しのばるゝことおほく、おほやけわたくし、
ものゝ折ふしのにほひうせたる心地こそ
すれ。花鳥の（柏木の事をのたまふ）色にもねにも思ひわきまへ、
いふかひあるかたの、いとうるさかりし
ものを、などのたまひ出でゝ、みづから（細 うるさきハ[illegible]）
かきあはせ給ふ（孟 源也）御琴のねにも袖ぬらし

給ひつ。（眠 女三の宮柏木の事をきゝ給ふやと思しめして）みすのうちにもみゝとゞめてや聞（源の）
給ふらんと、かたつかたの御心にはおぼしな
がら、（眠 宮上を柏木とおもひやる也）かゝる御あそびのほどには、まづ恋しう、（源の詞也）
内裏などにもおぼし出でける。こよひは
すゞむしのえんにてあかしてんとおぼし（孟 源の）
のたまふ。御かはらけ二わたりばかりまゐる
程に、冷泉院より御せうそこあり。（孟 御裏也）御前の
御あそびにはかにとまりぬるを口をしがりて、
左大弁、式部大輔、又人〴〵ひきゐて、さるべき（冷泉院へ）
かぎりまゐりたれば、（孟 冷泉院へ）大将などは六条院に
さぶらひ給ふときこしめしてなん（冷泉院の）
しめしてなん

雲のうへを 細 院をさしてのたまふ
しまさせ給ふ所ハ月ハ物わすれせぬと
ありとぬといふ心ハ月ハわすれ
給ハぬといふ也 既 月も見えれ
給へぬ也 孟 冷泉院
今も仙洞におハしませど
おとづれ給ハず也と云々 細 なに
ばかりところせき
秋の月と御返しを源
どくいひそれ人々
まうでせぬやうの
同じくハ源まうり給へ
かしとぞ

冷泉院
雲のうへをかけはなれたるすみかにも
物わすれせぬ秋の夜の月。おなじく
はと、きこえ給へれば、なにばかりところせき身
のほどにもあらず、いまはのどやか
におぼしすぐすべき御ありさまなれども
まゐりもつかうまつらぬを、本意なき
ことにおぼしあまりて、おどろかさせ
給へるもかたじけなしとて、にはかなる
やうなれどまゐり給ふ。
源
月かげはおなじ雲井にみえながら
わがやどからの秋ぞかはれる。ことなる
ことなかめれど、いにしへいまの御ありさまの

月かげハ 細 御返し也
たびたびの月をもみて
見給ふ猶宮の御(?)
あはれなる事の心の義也
しかし 既 源早下の
心をも又冷泉院の位
をさりてましませども(?)

御ありさまのたゞ人(?)
の御身となりて源氏
の御身と同じ御事也
人々の御車 孟 夕霧左大臣
又 細 院のへん(?)
めしよせらるべし
を御供にまゐらるべし

左大臣の 細 致仕大臣の
子息ども也
の夜もあり
あかねば(?)
ちゝく 孟 直衣布袴
なりとも下襲を
ものせずしてまゐる
しのびたる
御直衣布袴事 西宮抄
公上臈着直衣下襲 著
下襲 随便 不常事 云々
御そハ源氏と共に
二人ながらのうし
うつし 細 源の御供に参る也

おぼしつゞけられたるまゝなめり。御使に
さかづきたまひて、禄いとになし。人々
御車しなじなのまゝにひきとゝのへて、御前の
人々たちこみて、しづかなりつる御
あそびまぎれて、いで給ひぬ。院の
御車に親王たてまつり、大将・左衛門督・
藤宰相など、おはしけるかぎりみな
まゐり給ふ。直衣にて、かろらかなる
御よそひどもなれば、下襲ばかり
たてまつりくはへて、月ややさし
あがり、ふけぬる空おもしろきに、わかき人々
笛などわざとなくふかせ給ひなどして、
しのびたる御まゐりのさまなり。

師 事によりて移りかはる
作進退あるべし

にこそあらめ 抄 聖る
世をすてゝ出家する院
思ひ給ふべからぬ事なれ

うへさまあまりにもかけまくもかしこけれど
しもかくしりぬべくもてなしたまふらん
れ給はでは人のうらみもまたおほかるべし 師 信近ハ義とえらる 細 冷泉院のし 細 冷泉院の御事
しりつゝもよそに見たてまつりつべく
まことにかのすべき事ことわりなれど
さりとてさらにいかゞはせん 抄 中将の御事也
どうしてかくはおもひたまへらるゝぞ 細 冷泉院の御事也
ひまなくてかくさぶらひ給ふべき事
こゝをはなれぬまでもてなしたまふらむ 花 冷泉院の御事
また思ひのほかの事もいできなば 孟 人のうへも世のうさをも
うしろめたくて おもひのまゝにうけたまはる 抄 御詩も前も有かたき
まことにさらにいづかたにつけても 孟 つれなき事也
のこるかたなくおもひしりぬべくなん

御せさせたまひてあるまじき事にも 細 御ぶん也
心にかゝりて有るにかひなくもなりぬべき
つれなき事は院の御身のため也
師 院の御ありさまにおもひなりぬべき
人の心のうらめしさにおもひなりぬるは
さらにあるまじき事かな 孟 御ぶん
源氏 御せうとは 孟 源氏
ひとりゆゑのかくては 源氏 ゆるされぬ御事にて
源氏の御こゝろ 抄 権勢盛衰

まことにかくてもあらぬ御ありさまにて
ようもおぼしかけずかくなむとおぼしたつ 師 寺 御さとし
源氏は中宮の御方にはわたり給はで 細 御はなれ
御物語などしたまひて 源氏 今はいかゞ 孟 是より源氏の御
御すまひのほとりにもおぼしやりて
まことはさもやとおもひまどひたまふへ
てまかでられぬ宮の御ありさまなどにもあはれ
源氏は中宮のおぼしたつ事をもきこえさせ給
かくもつらぬ身の御宿世のほどもえおぼしはなたれず
ねんごろにおもひ給ふもいとほしくて
つれなきのみこそうらめしくまつりたまへ
まことにあらしかなとも心うきこそあれ

月秋女三宮なども皆世
を背き給はんとすれ。
福集云かのゝ世をすてよとく
れなかへんとうとくし
とうちとりしれかあうりもらさ
くもらさうしつけし
孟 秋好へおこもやうつ
らし 細 我門ひろげ侍
るやせしうるも世をそむき我
うらき世のうらみしんはまり
けすとへるしところ
らの人乃ろくてぞ
細 秋好の御おもひふかく
まりらも今は隙もなく
てぬ事勤へても細し家
まわいつくし 御内裏
ハゞかりあうとしてハつり
なかく侍らん 御おぼしめし
出でハとひとこしてぞ
つゝおきのうちう云れ
ところのそむき 孟 孟之
細 なしうく彼らの世をそむき

それはこそさのみわかうざうおかれて侍れ
ハ世だにみれしらすまね〳〵もやうしやうく（孟 遁世してもわろくやうく）
おひさらめりと海りのんぐ乃りのくちう（孟 御息所などの事を前に）
なりしへうしよりし給なりしそ給ひくもこ
こしつかしさんどみかしらしめて物を
さ世にきよへなとしまわやりなかりさ海のさこ（秋好）
え〳〵き給御のひとわうちぶとなるつれ（細 秋好の御事也）
けりひそしてのへの色にもかうう侍し（細）
年比ひらも出つかうまつきのまくらゆよ
おほへしうて思給ぞ。いはしうのかよひわりし（冷泉院のうちを出て）
うそりるへのそむきさりせどいとうちう（八秋好の御事なるべし）
おひぬるこゝも侍るずしくえんのうら

のかうよかりの社の身とつりかさん 松の方 秋天は世師く秋好この女御ならせと自
然よね面白し 細 御事とと源氏と粉をるなり〳〵はとハ御まで下るなろとく
むめいなくと 師 ゑんのうらしハ遁世のるまし源とこの上しさりハしねむまつけて何事もとも
中すしひきらと秋好の出陳すさまつけてもくのかりどとしさ
りぶせらく

きくめなくとせしのひなから
細世君ハ方無常と秋
と知るなり〳〵と念
ていからうしいとゝ

おしさとうけ給ちらしゑハなまこしもみえ（孟 何るぞ）
かしきうけゆは、さうしてさをあらくひてふ
とく侍しこそ給。おもは海ひかげ海よ（細 源の聞し 孟 内裏ようけすりすつ時）
くハ限わかありうのけさうしもいひしよ（中宮も今しかきりことし）
うすまらつけゆくしさとし いはへなうこと
ようけそくふれたはとゞせこそ給ふれんつ（何かつけて内裏何も自由なる人にしと）
ひひを侍しへざこかめなきさせしらひなり
らとさしてつとうぞしもるさうへさ（咲 さしあたるまで世を背くるかいかならじととも）
やうやうそむこゝろなるすかしもわりなくてふ

いやとりべき月ばかりつけくじてやむまめの
うしろつゞく月うしのさ作代のさく
うきもひとまりよこそふ比乃んなりて
ひがくさうもそろうばかしさ小すらんへを
こそ捨れけてきしつとあるきのしら浦こし
このあんし学し語なきふくろうかくてう
語りぬあるらりしとつくうさひさくし語
都比恩承の比身乃らるしうお語ら人あり
さ海いろ〳〵櫻のあるしまかしひくめかりふら
んすきうけふくまる人まうとまれあり
語比名のりあとのつくえうてり乃うしとら
の比ゆけいつしらくて語乃らとうのづら

石比集一承　細　六条比息ぎと
尭さむきふらす深ハあく
くしのへ下もらうれ常語
ひたくの語ふく
人まさしされあうりす名
ふのしみよの　孟比息承の
物まさい出あるうと
深のの二らしまるし

らんのくらさうるてつらんさうしめく
り乃語のそうつうしそうてさくての
世乃いそけしくあちうてぞりやそも
みのすのひろん承語のくらしう承海外
くさ浅ますまさ中ハえうら出さうて語ハ
でしてあさきん人のれありさ海のつてうり
しぬさ語よ得のらくしの語しとさう
ちうしあらいうしそてふぞうそりつべき
こしらく語り乃れしむすうしれ移の衣ぐう
つまとゆすれぬくしめく物のあるさ申あ
へやしさうりろうぞ物そえれさ代いそうう
ひさうきん人の、すめともこうて語ろく

ふくさのしうきそうしうそ
孟比息承の語人と経
とぞゐそゑくよまし由
する他てさうし秋の
ノフト

さらみるしあらやさうてを
細物のけるぞさるしうても
雁ハらくうるぐさる〳〵と
ちかう乗日
とされしれの衣ぐうりす
ちきねろすくしゆく物のあるさ
細呉例の世の出しさのさうそ
後の世のくうしまきるさい
あくまうりしうく
ひさらくつひさうせん
細なさうの乃たをもらう
とうこさうみする人のこしと
だんをやすさるさうく孟設

生めくらを説こころすゝ人
のあれうしとこ
うめりのかもこゝろし給ふ
ゞく 盂 三多色下の嗔恚
の焔と清滅なしうきこ
衆年のつりうおもひ
てぬかとしとし
その前の世なんうれも
法 形ものがくまじきこと
人なる法の相妄執し心苦
一切の罪障さと払ひのむ
想しこしまよひをさとしけ
てこの一んようきこゝするまと
のあらひまじとうゑんへし
目蓮ヶ仏ょくぼさ
ど給ふ目蓮こども六通
こゝはりて仏よ教導す
ひゝらき仏よらくき
あらんもあらかし長母
の餓鬼道ニ落るとを
救ふべきよし盂蘭盆
経にとけり 細目蓮救
母経ハ偽作の経也只盂
蘭盆経ハ仏りくさし
しれ仏ょ親孝する事さし
えつゝ世のふすしさ 盂
の出家があつらるもまち
やりしく仏なし
のはるてしうじし

うらぼんの時のかざすも海し給
みしるもやうり月りかねんおもう
なべこしもあいらなしすあつさり
法ぐなかさし覚しめくさししく衰みえ
まかせて、その日のかなる人誰もの々ま
じきつしくえらるかしく網つとのらわる
わびいちい捨しれ仰しねする目蓮が
仏よちうきひろうの身まてしる
まするひそんさかしみもえつせ法なさ
らん抽かし玄のんさしとてさ法らんま
この世にはうしのうやしかわざろう
よりしきうれしうつごしとちかのそらん

孟 母の堕獄せしと目蓮がれいそすくひされなやうしゆんゆえ
れそんらくへさゝし法ととらせまんべぶり
六まゝかりこゝ仰りゐるがしく、あさ
やうゐ、えりゐるかいのとさうさやうなる
さ海り、あけ生しし、仰りつゝらう
らの川よわまなべく、今ゐ川かと思
ひあつらも、けゐこそうちろゆさゐさこ
しるれなるど世中すまへくくろるく心
ゆまそて月ゐてさこしとどゆのしうしまへ
どきばやつかくさ出分のわりさ夜と
もすらりまんへくらら一色のひてかやすかし

ゑうるか世のゆきてはなれまいるこし
せの海をかつさ堂にあま
ゆるく聞かつて世の海よりもや
一もるすくさなしきもし
ころうの 川 出男家の
出家のかうてもりも今はさか
しくて明事しあべに
世をそむきし海の出観
めく一つの出家心の海
ともおもかゝらもはら法を
んしるからこしかしひへく
うらかさとし 桜日義
まへかうら思ひく
盂 衣あはおもひて女まふ
ことも羽は名ふ生まある
どこらくしき供養

上達部どもまいり給へるかぎり
細 明石の女御にて六条院の御むすめ也
只冷泉院と女御へと夕霧と大切なり 孟 明石
の女御も夕霧も皆御鍾愛の御事を
大切なるよし

御対面のまれなり
孟 細 御対面あるべきさし
さめ既に服段あるまじし
師 冷泉院御位ゆづり給
りしては源氏の御対面
まれなりしなるを
急がされ給と也

御ありき、けさはあらはれ給て上達部
どもまいり給へるかぎりは、みな御をくり
つかうまつり給。春宮の女御の御ありさ
まならびなく、いつくしくかしづき
たて給へるかひがひしさも、大将の又
人にすぐれ給へるありさまも、いづれと
なくめやすきを、猶この冷泉院を思ふ
心ざしは、すぐれてふかくあはれにおぼえ給。院も、つねにいぶかしう
思ひきこえ給しに、御対面のまれに
いぶせうのみおぼさるゝに、いそがされ給て
かく心やすきさまにとおぼしなりけるになん。

中宮ぞなか/\まかで
孟 秋好の御里出なく
うちそひてのみおはします
師 冷泉院おりゐの後は
中宮も御そばをはなれ
ず
何ごとも御心やれる
細 秋好中宮の御満足なり
孟 何事も秋好の御満足
なれども母御息所の事
を歎き給ふ
人のゆるしきこえ給ふま
じ
冷泉院の御ゆるし
あるまじきなり 孟 源氏の
御意見のごとく人の御ゆるし
なきと也
功徳のことをたてゝ
孟 秋好の仏法を求ると
くすりつれ給ふ
心ふかう世中をおぼし
しれる 孟 秋好の御心は
世の中のはかなきを悟りて仏法に心
を入れて

中宮ぞ中々まかでさせ給ふこともいとかたう
成て、たゞ人の中のやうにならびおはします
に、いまめかしう中々むかしよりもはなやかに
御あそびをもし給ふ。何ことも御心やれる
ありさまながら、たゞかの宮す所の御ことを
おぼしやりつゝ、をこなひの御心すゝみにたるを、
人のゆるしきこえ給まじき事なれば、功
徳のことをたてゝおぼしいとなみ、いとゞ心
ふかう世中をおぼししれるさまになりまさり
給。
源氏も秋好の御母御息所の御事を
思ひつゞけ給て御心ぐるしくおぼす 此八巻なりとぞ

まかしくお能始の巻　あさせ絵しるぞ
ふおひもろうりよくみて　河の功徳請くしいきぞ
よりかお家の奉公ハ
人ゆきなきあれば深乃節更大かごとく
御くゆこうしと世の中をよろく出月ハ入よ分ふとかり